

◎ 指示があるまで開かないこと。

(平成13年3月17日 14時40分～16時50分)

注意事項

1. 試験問題の数は50問で解答時間は正味2時間10分である。
 2. 試験問題の持帰りを認めない。
 3. 解答方法は次のとおりである。
- (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 大宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして
101 a b c d e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… (解答したことにならない。)

- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」あとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

- (4) 1間に二つ以上解答した場合は誤りとする。

- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 80歳の女性。高血圧症と多発脳梗塞とで外来通院中である。85歳の夫と二人暮らしであり、服薬管理は夫が行っている。最近着替えに時間がかかるようになり、金銭管理でミスをするようになった。徘徊行動はなく、火の不始末はない。

この患者に必要でないのはどれか。

- a ホームヘルプサービス
- b デイケア・デイサービス
- c 訪問リハビリテーション
- d 訪問指導
- e ナイトケア



2 28歳の外国人女性。4か月前に日本に来てから全身倦怠感、体重減少、微熱および咳嗽が続いている。来院時の喀痰塗抹細菌検査で抗酸菌を認めた。本国で同居していた家族3名が、最近肺結核で入院したことである。事情があって、高額の医療費は支払えないという。

この患者の診療について適切なのはどれか。

- (1) 本国の家族の病状について情報を収集する。
- (2) 医療費を請求しない検査については同意を必要としない。
- (3) 滞在が適法であることが確認されてから治療を開始する。
- (4) プライバシー保護のために支援グループ等とのかかわりを避ける。
- (5) 二次感染予防のために生活指導を行う。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)



3 68歳の男性。午前2時ころ救急隊によって搬送された。当直医が診察したところすでに死亡していた。この患者は前日午後4時ころ、他院の内科外来を受診しており、不安定狭心症と診断されている。入院治療を勧められたが患者はこれを拒否し、投薬を受けて帰宅したことである。死体の後頭部に擦過傷を認める。

当直医の対応として最も適切なのはどれか。

- a 死因を狭心症として死体検案書を交付する。
- b 他院の内科外来担当医に受診時診断名を確認し自ら死亡診断書を交付する。
- c 他院の内科外来担当医に死亡診断書を交付してもらう。
- d 病院長に死亡診断書を交付してもらう。
- e 所轄警察署の警察医に死体検案を依頼する。

4 27歳の1回経産婦。妊娠20週で軽度下腹部痛と少量の性器出血とのため来院した。前回妊娠は10週で流産し、今回が3回目の妊娠である。超音波検査を行ったところ、児の心拍動は認められない。児は2日後に娩出された。

この患者で正しいのはどれか。

- a 自然流産
- b 習慣流産
- c 自然死産
- d 人工死産
- e 人工妊娠中絶

5 50歳の男性。2週前から公園で寝泊まりしていることが目撃されている。2日前からせん妄状態に陥っており、意味不明の言動が認められる。脱水状態で衰弱しており、他人に危害を加える様子はない。所持品から遠隔地にある精神病院の診察券が発見され身元が判明した。配偶者がいるようであるが、連絡がつかない。

この男性を精神保健福祉法に基づいて入院させる形態として正しいのはどれか。

- a 医療保護入院
- b 仮入院
- c 応急入院
- d 措置入院
- e 緊急措置入院

6 55歳の男性。胃癌の術後、縫合不全で腹腔内膿瘍が生じた。膿瘍ドレナージ液から薬剤耐性緑膿菌が検出された。

院内感染を防ぐために、最も適切なのはどれか。

- a 陰圧室に隔離する。
- b 病室の入口に粘着マットを敷く。
- c 診察時にマスクを使用する。
- d 入退室時の手洗いを徹底する。
- e バンコマイシンで治療する。

7 78歳の女性。在宅療養中のところ介護老人保健施設に初めて入所した。10年前からB型肝炎ウイルスのキャリアであることが病歴に記載されている。

必要な対策はどれか。

- a 個室に収容する。
- b 介護者にB型肝炎ウイルスキャリアであることを周知する。
- c 介護者は入室時には着衣を取り替える。
- d 介護者はこの入所者の汗には直接触れない。
- e 入浴時は他の入所者と同じ浴槽を使わない。

8 23歳の看護婦。HBs 抗原陽性患者の採血をした後、その注射針で自分の指を誤って刺した。この看護婦は HBs 抗原・抗体が陰性であった。

直ちに行うべきことはどれか。

- (1) 口で指から血液を吸い出す。
- (2) プレドニゾロンを筋注する。
- (3) HBワクチンを接種する。
- (4) HBs 抗体含有ガンマグロブリン製剤を投与する。
- (5) 肝機能検査を行う。

a (1)、(2)、(3)

b (1)、(2)、(5)

c (1)、(4)、(5)

d (2)、(3)、(4)

e (3)、(4)、(5)

9 60歳の男性。定期健康診断を受けに来院した。高校卒業後から、染料工場に勤務していた。現在では製造中止となっている β -ナフチルアミンを使用する仕事に数年間従事したことがある。現在とくに自覚症状はない。最も気をつけるべき疾患はどれか。

- a 再生不良性貧血
- b 多発神経炎
- c 肝血管肉腫
- d 膀胱癌
- e 肺癌

10 37歳の女性。8年前から嚥下障害を自覚していたが、最近症状の増悪があり来院した。食道造影写真(別冊No. 1)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 24時間 pH モニタリングが診断に不可欠である。
- b 下部食道括約筋の一過性弛緩反応が頻発する。
- c 下部食道筋層間神経叢の変性・消失がみられる。
- d 抗コリン薬が有効である。
- e 食道切除術の適応である。

別冊

No. 1 写 真

11 59歳の女性。6年前から一過性に顔面のほてり、発汗および動悸が起り、不眠が持続するため来院した。閉経は52歳。脈拍72/分、整。血圧138/74mmHg。甲状腺機能検査と副腎皮質機能検査とに異常はない。

この病態で分泌亢進が予想される下垂体ホルモンはどれか。

- a 成長ホルモン
- b ゴナドトロピン
- c 副腎皮質刺激ホルモン
- d プロラクチン
- e 抗利尿ホルモン

12 32歳の2回経産婦。7週間の無月経と嘔気・嘔吐とを主訴として来院した。既往歴と妊娠歴とに特記すべきことはない。バイタルサインと外診所見とに異常はない。内診では、子宮は鶏卵大、軟で圧痛は認めないが、右の付属器と思われる部位に鶏卵大の腫瘍を触知した。経腔超音波検査で、子宮内に妊娠7週相当の胎嚢と心拍動を有する胎芽とを確認した。触知した腫瘍は径5cmの充実性成分を含まない右付属器の単房性囊胞であった。

次に行うべきことはどれか。

- a 4週後再検査
- b 超音波ガイド下で囊胞を穿刺
- c 腹腔鏡下で囊胞を摘出
- d 開腹して囊胞を摘出
- e 人工妊娠中絶術

13 25歳の1回経産婦。妊娠38週で昨夜から3、4分毎の自然陣痛が発来し、翌朝破水を訴え入院した。今回の妊娠経過中に異常は指摘されていない。入院時の内診所見では子宮口3cm開大、展退度80%、破水していた。児は第2頭位で推定体重が2,700g、先進部は浮動していた。胎児心拍数陣痛計を装着し陣痛室で観察していたところ5時間後の内診で、子宮口5cm開大、展退度80%、先進部はほぼ固定、小泉門を3時の位置に触れた。この時点の胎児心拍数陣痛図(別冊No. 2)を別に示す。

次に行うべきことはどれか。

- a 妊婦を病室に戻す。
- b 胎位胎向を確認する。
- c このまま自然経過を観察する。
- d オキシトシン投与を開始する。
- e 帝王切開術を行う。

別冊
No. 2 図

14 28歳の初産婦。妊娠39週で自然陣痛が起り入院した。身長158cm、体重83kg。脈拍80/分、整。血圧120/80mmHg。分娩経過観察中であったが、子宮口5cm開大で分娩進行が停止した。胎児心拍数異常も出現したので緊急帝王切開術が行われた。児は2,450gの女児、出血量は680g、手術時間は45分であった。術後48時間のベッド上安静後、歩行を開始したところ、トイレで排尿後に突然激しい胸痛と呼吸困難とを訴え、チアノーゼが出現した。

最も考えられるのはどれか。

- a 急性心筋梗塞
- b 脳梗塞
- c 解離性大動脈瘤
- d 肺塞栓
- e 脂肪塞栓

15 38歳の男性。両眼の視力障害と視野異常とを訴えて来院した。視力は右0.3(矯正不能)、左0.8(矯正不能)。眼圧は右12mmHg、左13mmHg。眼底検査で両眼の視神経乳頭の蒼白化がみられる。視野(別冊No. 3)を別に示す。

診断に有用な検査はどれか。

- a 光覚<暗順応>
- b 蛍光眼底造影
- c 網膜電図<ERG>
- d 頭部単純MRI
- e 脳脊髄液検査

別冊
No. 3 図

16 12歳の男児。低身長を主訴に来院した。在胎39週、頭位、身長43.5cm、体重2,100gで出生した。運動発達は正常、知的発達に問題なく、田中・Binet式IQテスト105である。二次性徴はまだ明確ではない。現在の身長125cm(-2.1SD)、体重26.5kg(-1.8SD)である。骨年齢の遅れがなく、成長ホルモン分泌予備能試験で分泌不全はない。

予想される成長曲線は図(別冊No. 4)の①~⑤のどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊
No. 4 図

17 36歳の女性。微熱と手足の関節痛とを訴えて来院した。数年前から家事で冷水を使用すると手指が白くなることに気付いた。また最近、労作時の息切れも自覚するようになった。体温36.5℃。脈拍96/分、整。血圧136/88mmHg。手指、手背および顔面皮膚の硬化と舌小帯の短縮とを認める。抗核抗体1,280倍(基準20以下)、抗Scl-70抗体陽性。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 悪性高血圧症
 - (2) 逆流性食道炎
 - (3) 心筋梗塞
 - (4) 尿細管性アシドーシス
 - (5) 肺線維症
- a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

18 60歳の男性。活動性肺結核の診断で入院した。イソニアジド、リファンピシン及びストレプトマイシンによる治療を開始した。肺機能検査は正常であった。治療開始1か月後、発熱と発疹とを認めた。飲酒は週にビール2、3本を30年間。血液所見：白血球11,000(好酸球11%)。血清生化学所見：GOT 60単位(基準40以下)、GPT 112単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ420単位(基準260以下)、γ-GTP 90単位(基準8~50)。IgM-HAV抗体陰性、HBs抗原陰性。

この患者の病態の原因として最も可能性が高いのはどれか。

- a 肺結核の増悪
- b 薬剤
- c A型肝炎ウイルス
- d B型肝炎ウイルス
- e アルコール

19 40歳の男性。東南アジアからアフリカにかけて1か月間旅行し、帰国直後から悪寒、戦慄および頭痛を伴う41℃前後の発熱を繰り返したため入院した。入院時、肝と脾とを触知する。尿所見：ヘモグロビン尿陽性。血液所見：Hb 6.2g/dl。

- 最も考えられるのはどれか。
- a インフルエンザ
 - b ウイルス性肝炎
 - c コレラ
 - d 熱帯熱マラリア
 - e アメーバ赤痢

20 20歳の男性。スキーで転倒して左顔面を強打し、左眼の視力障害に気付いて来院した。視力は右1.5(矯正不能)、左眼前手動弁(矯正不能)。左眼の対光反射では直接反射が消失しているが間接反射は正常である。両眼眼底に異常はない。

障害部位として考えられるのはどれか。

- a 視神経
- b 視交叉
- c 視 索
- d 外側膝状体
- e 視放線

21 49歳の男性。右頬部の腫脹と疼痛とを主訴に来院した。4か月前から右の頬部痛と歯痛とが出現し、徐々に増悪してきた。2か月前から右頬部の腫脹を伴うようになった。血の混じった悪臭の鼻漏を認める。副鼻腔手術の既往はない。副鼻腔単純CT(別冊No. 5)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 眼窩炎性偽腫瘍
- b 急性副鼻腔炎
- c 慢性副鼻腔炎
- d 歯性上顎洞炎
- e 上顎悪性腫瘍

別 冊

No. 5 写 真

22 32歳の男性。呼吸困難のため救急車で搬送された。同行した家族は、薬物を誤飲したという。軽度の意識障害と縮瞳とがみられる。胸部聴診で心雜音は聴取しないが湿性ラ音を聴取する。

嚥下したものとして最も考えられるのはどれか。

- a 有機燐
- b 硫黄化合物
- c パラコート
- d 無機水銀
- e 有機フッ素

23 45歳の男性。微熱、全身倦怠感および食欲不振を訴え来院した。胸部エックス線写真で右胸水を認めた。血清生化学所見：総蛋白6.6 g/dl、血糖120 mg/dl、LDH 350 単位(基準176～353)、アミラーゼ 152 単位(基準37～160)。胸水所見：外観は淡黄色透明、蛋白4.4 g/dl、糖22 mg/dl、LDH 120 単位、アミラーゼ30 単位、アデノシンデアミナーゼ増加、細胞分画はリンパ球優位、細胞診は陰性。

胸水の原因はどれか。

- a 癌 性
- b 膵 性
- c 結核性
- d ウイルス性
- e 心原性

24 75歳の男性。嚥下痛を訴えて来院した。40年前から糖尿病の治療を受けている。食道造影写真(別冊No. 6)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 食道癌
- b 食道カンジダ症
- c 食道静脈瘤
- d アカラシア
- e 食道平滑筋腫

別冊
No. 6 写 真

25 64歳の女性。腹痛と血便とを主訴に来院した。10数年前から慢性関節リウマチのため近医に通院していた。1か月前から時々臍周囲から下腹部に痛みを覚えるようになり、今朝から激しい腹痛と血便とが出現した。体温37.6℃。脈拍96/分、整。血圧136/88mmHg。手指にスワンネック変形と尺側偏位とを認める。血液所見：赤沈102mm/1時間、赤血球320万、Hb9.6g/dl、Ht31%、白血球12,600(桿状核好中球12%、分葉核好中球73%、好酸球1%、単球2%、リンパ球12%)、血小板56万。CRP10.6mg/dl(基準0.3以下)、RAHAテスト2,560倍(基準40以下)。

この疾患でみられるのはどれか。

- (1) 強膜炎
 - (2) 皮下結節
 - (3) 肺線維症
 - (4) 陰部潰瘍
 - (5) 尿道炎
- a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

26 35歳の女性。5年間の不妊を主訴として来院した。月経周期は28日型、整。基礎体温は2相性で、高温期持続日数は14日前後である。子宮は正常大で、両側付属器は触知しない。夫の精液所見は正常。性交後試験で子宮腔内に運動精子を認めた。子宮卵管造影写真(別冊No. 7A)と24時間後の骨盤エックス線単純写真(別冊No. 7B)とを別に示す。

この患者で最も有用な検査はどれか。

- a 経腔超音波検査
- b 子宮内膜組織診
- c 子宮鏡検査
- d 腹腔鏡検査
- e 骨盤部単純MRI

別冊
No. 7 写真A、B

27 65歳の男性。朝起きたら左のまぶたが挙がらないと言って来院した。複視を訴える。意識は清明。左眼瞼下垂、左瞳孔散大および左眼の外転位を認める。顔面の感覚は正常。

この患者で考えられるのはどれか。

- (1) 脳動脈瘤
 - (2) 糖尿病
 - (3) 甲状腺機能亢進症
 - (4) 重症筋無力症
 - (5) ミトコンドリア脳筋症
- a (1)、(2)
 - b (1)、(5)
 - c (2)、(3)
 - d (3)、(4)
 - e (4)、(5)

28 26歳の初産婦。妊娠39週で陣痛が発来し入院した。定期的な妊婦健康診査で異常は指摘されていない。14時間経過後の内診所見で、児頭は屈曲しており、矢状縫合は骨盤の前後径に一致し、子宮口は全開大していた。胎児心拍数陣痛図に異常は認められない。

この時点では適切なのはどれか。

- (1) 児頭の最大径で出口部を通過させる。
- (2) 第2回旋の終了を待つ。
- (3) 泉門の位置を確認する。
- (4) 児頭をゆっくり娩出させる。
- (5) 子宮底を圧迫する。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

29 24歳の初産婦。妊娠39週に自然陣痛が発来し入院した。妊娠経過中に異常は指摘されていない。入院後の臨床経過は順調で子宮口全開後約1時間半で経腔分娩した。新生児出生時体重は2,980gで外見上異常はなかったが、1分後のApgarスコアは4点であった。その後、酸素投与のみで5分後のApgarスコアは9点となった。分娩直前の胎児心拍数陣痛図(別冊No. 8)を別に示す。

分娩直後、第1啼泣前に採られた臍帶動脈血の酸塩基平衡で最も考えられるのはどれか。

- a 正常
- b アシドーシスを伴わない低酸素血症
- c 呼吸性アシドーシス
- d 代謝性アシドーシス
- e 混合性アシドーシス

別冊
No. 8 図

30 24歳の女性。昨年、職場の定期健康診断で血小板数の軽度低下を指摘された。その他の結果に異常はなかった。今年の健康診断でも同様の指摘があり、精査を勧められて来院した。生来健康で、これまで紫斑と鼻出血とはなく、月経にも異常を認めない。身体所見に異常はない。血液所見：赤血球460万、Hb 13.5g/dl、Ht 40%、白血球6,700、血小板8万。末梢血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 9)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 特発性血小板減少性紫斑病
- b 骨髄異形成症候群
- c 二次性血小板減少症
- d 血小板機能異常症
- e 偽性血小板減少症

別冊
No. 9 写真

31 40歳の女性。2か月前から口腔内粘膜疹、1か月前から全身に径3cmまでの水疱が出現してきた。口腔内粘膜疹の写真(別冊No. 10A)と水疱の病理組織H-E染色標本(別冊No. 10B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 尋常性天疱瘡
- b 水疱性類天疱瘡
- c 菟疹状皮膚炎
- d 後天性表皮水疱症
- e 晩発性皮膚ポルフィリン症

別冊
No. 10 写真A、B

32 78歳の男性。慢性肺気腫で通院治療を受けている。2日前から38°Cの発熱、咳嗽および膿性痰が出現し、労作時呼吸困難も強くなったので来院した。呼吸困難は Hugh-Jones の分類IV度であった。胸部エックス線写真に浸潤影を認めない。

まず行うべき検査はどれか。

- (1) 胸部CT
- (2) 気管支鏡
- (3) スパイロメトリ
- (4) 動脈血ガス分析
- (5) 咳痰 Gram 染色

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

33 22歳の女性。4か月前からの無月経を主訴として来院した。妊娠反応は陰性で、基礎体温は低温1相性である。子宮は正常大で、両側付属器を触知しない。経腔超音波検査を行った。子宮の超音波写真(別冊No. 11A)と卵巣の超音波写真(別冊No. 11B)とを別に示す。

診断のためにまず投与する薬剤はどれか。

- a エストロゲン
- b ゲスターーゲン
- c クロミフェン
- d プロモクリプチン
- e ゴナドトロピン

別冊
No. 11 写真A、B

34 42歳の女性。左側胸痛を訴えて来院した。数年前から時々左側胸痛を自覚している。痛みは数分程度持続し、体動時だけでなく安静時にも起こる。心尖部で収縮中期クリックと3/6度の収縮後期雜音を聴取する。

この患者の診断に最も有用な検査はどれか。

- a 心音図
- b 運動負荷心電図
- c 心エコー図
- d 心筋シンチグラフィ
- e 心カテーテル検査

35 3歳の男児。急性中耳炎に罹患後、聞き返しが多くなった。インピーダンスオージオメトリによる検査結果(別冊No. 12)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 悪性外耳炎
- b 鼓膜炎
- c 渗出性中耳炎
- d 慢性中耳炎
- e 真珠腫性中耳炎

別冊
No. 12 図

36 59歳の男性。仕事中に急に頭が痛いと訴えて倒れたため救急車で搬送された。体温 37.2 ℃。呼吸数 30/分。脈拍 70/分、整。血圧 190/100 mmHg。嘔吐があり、興奮と多動とがみられる。神経学的身体診察では、意識レベルの軽度低下と右上下肢の麻痺とを認める。

まず行うべき検査はどれか。

- a 脳波検査
- b 頭部単純 CT
- c 頭部単純 MRI
- d 脳シングルフォトンエミッション CT<PECT>
- e 脳血管撮影

37 34歳の女性。右股部から股関節にかけての疼痛を主訴に来院した。4年前に全身性エリテマトーデスを発症し、現在も副腎皮質ステロイド薬による治療を受けている。両股関節の単純エックス線写真では異常を認めない。

股関節病変の診断に最も有用な検査はどれか。

- a 超音波検査
- b 関節造影
- c 単純 MRI
- d 骨シンチグラフィ
- e 骨生検

38 40歳の男性。健康診断で緑内障を疑われて来院した。眼精疲労以外の自覚症状はない。視力は右 1.2(矯正不能)、左 1.5(矯正不能)。検査法の写真①～⑤(別冊 No. 13 A、B、C、D、E)を別に示す。

この患者に必要な検査はどれか。

- (1) ①
 - (2) ②
 - (3) ③
 - (4) ④
 - (5) ⑤
- a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

別冊

No. 13 写真A、B、C、D、E

39 50歳の男性。1か月前から特に誘因なく食思不振と腹部膨満感とが出現し、次第に増強するため来院した。20歳のときに交通事故で受傷し輸血を受けた。7年前から慢性肝疾患で不定期に通院していた。意識は清明。腹壁静脈怒張し、腹部に波動を認める。両側下腿に浮腫を認める。血液所見：赤血球380万、Hb 11.5 g/dl、Ht 38%、白血球4,200、血小板6万。血清生化学所見：総蛋白5.9 g/dl、アルブミン2.3 g/dl、総ビリルビン2.0 mg/dl、GOT 72単位(基準40以下)、GPT 48単位(基準35以下)、アンモニア40 μg/dl(基準18~48)。ICG試験(15分値)45%(基準10以下)。試験穿刺で得た腹水は淡黄色で、Rivalta反応陰性であった。

適切な処置はどれか。

- (1) 低蛋白食摂取
- (2) 食塩摂取制限
- (3) 利尿薬投与
- (4) アルブミン投与
- (5) 濃厚血小板投与
 - a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

40 57歳の女性。1か月前からの視力低下を訴えて来院した。10年前に近医で糖尿病を指摘されていたが、通院せず放置していた。視力は右0.3(矯正不能)、左0.2(矯正不能)。空腹時血糖200 mg/dl、Hb A_{1c} 9.0%(基準4.3~5.8)。左眼の眼底写真(別冊No. 14A)と蛍光眼底造影写真(別冊No. 14B)とを別に示す。

この患者への対応として最も適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 運動療法
- c 止血薬投与
- d 循環改善薬投与
- e レーザー光凝固

別冊
No. 14 写真A、B

41 40歳の男性。全身倦怠感があり来院した。23歳のとき、IgA腎症と診断されたが放置していた。身長175cm、体重70kg。血圧156/94 mmHg。下腿に浮腫はない。尿所見：尿量2,000 ml/日、糖(-)、蛋白1.5 g/日、沈渣に赤血球15~20/1視野、白血球1~2/1視野。血液所見：赤血球330万、Hb 10 g/dl、Ht 30%。血清生化学所見：尿素窒素54 mg/dl、クレアチニン4.0 mg/dl、Na 137 mEq/l、K 5.2 mEq/l。胸部エックス線写真に異常はない。

この患者の食事療法で正しいのはどれか。

- a 水分摂取量は1,000 ml/日とする。
- b エネルギー摂取量は2,300 kcal/日とする。
- c 蛋白摂取量は1.5 g/kg/日とする。
- d 食塩摂取量は10 g/日とする。
- e 新鮮な野菜や果物を豊富にとる。

42 5歳の男児。ネフローゼ症候群のためプレドニゾロン 60 mg/m²/日を連日投与されている。今朝、水痘の患者と接触した。
まず行うのはどれか。

- a アルブミン投与
- b インターフェロン投与
- c 高力価ガンマグロブリン投与
- d 弱毒化生ワクチン接種
- e 副腎皮質ステロイド薬中止

43 44歳の女性。最近、下肢に力が入らず、階段を昇ることができなくなったため来院した。夜間尿の増加にも気付いている。脈拍 76/分、整。血圧 172/102 mmHg。血漿レニン活性 0.2 ng/ml/時間(基準 1.2 ~ 2.5)、血漿アルドステロン 55 ng/dl(基準 5 ~ 10)。¹³¹I-アドステロール副腎シンチグラフィで左副腎に強い集積を認める。

この患者の治療に最も適した薬剤はどれか。

- a α受容体遮断薬
- b β受容体遮断薬
- c スピロノラクトン
- d サイアザイド系降圧利尿薬
- e アンジオテンシン変換酵素(ACE)阻害薬

44 5歳の女児。睡眠中の無呼吸のため母親に連れられて来院した。2年前から、いびきをかくようになり、半年前から夜間に 10 秒以上の無呼吸が頻回に出現するようになった。身長と体重は平均値をわずかに下回っている。中咽頭の写真(別冊 No. 15 A)と頭部エックス線単純側面写真(別冊 No. 15 B)とを別に示す。

この患者に適切な手術はどれか。

- (1) 舌小帯切除
- (2) アデノイド切除
- (3) 扁桃摘出
- (4) 鼻中隔弯曲矯正
- (5) 気管切開

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 15 写真A、B

45 55歳の男性。登坂時の突然の胸痛を主訴に3日前に緊急入院した。集中治療室に収容され、内科的治療により胸痛は消失し、循環動態も脈拍108/分、血圧160/110 mmHg以外は安定していた。しかし今朝、診察中に突然意識が消失した。頸動脈と大腿動脈との脈拍を触知せず、血圧は測定不能となった。入院時の心電図(別冊No. 16A)と意識消失直後のモニター上の心電図(別冊No. 16B)とを別に示す。

直ちに行うべき処置はどれか。

- (1) 電気的除細動
 - (2) 血液透析
 - (3) 経皮的心肺補助循環(PCPS)
 - (4) 緊急開胸手術
 - (5) 大動脈内バルーンパンピング
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 16 図A、B

46 73歳の女性。6か月前から次第に増強する右大腿近位部の疼痛を訴え来院した。10年前に右変形性股関節症で人工股関節置換術を受けた。現在独歩可能である。

この患者で最も考えられるのはどれか。

- a 化骨性筋炎
- b 関節周辺の骨増殖
- c 人工関節の脱臼
- d 人工関節のゆるみ
- e 股関節の感染

47 63歳の男性。3か月前から嚥下時の痛みを自覚し、徐々に症状が増悪するため来院した。検査で舌根部癌 T2N1M0と診断し、上咽頭から鎖骨上部の範囲で根治放射線照射を行った。

照射による合併症としてみられないのはどれか。

- a 皮膚の紅斑
- b 口内炎
- c 唾液分泌低下
- d 味覚の減退
- e 軟口蓋麻痺

48 23歳の女性。2年前に高血圧を指摘され、降圧薬による治療を受けていたが改善しないので来院した。血圧186/110 mmHg。上腹部に血管雑音を聴取する。腎動脈デジタルサブトラクション血管造影(DSA)写真(別冊No. 17)を別に示す。まず最初に行う処置はどれか。

- a 血管拡張薬腎動脈内投与
- b 血栓溶解薬腎動脈内投与
- c 経皮的腎動脈拡張術
- d 腎動脈塞栓術
- e 腎摘除術

別冊
No. 17 写真

49 62歳の男性。夕食後、突然吐血し、救急車で来院した。35歳時の交通外傷時に輸血を受けた。5年前に健康診断で肝障害を指摘され治療を受けている。緊急上部消化管内視鏡検査の食道写真(別冊No. 18)を別に示す。

最も適切な処置はどれか。

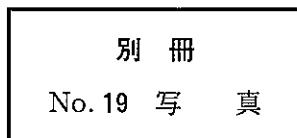
- a ヒスタミンH₂受容体拮抗薬投与
- b トロンビン液噴霧
- c エピネフリン液噴霧
- d 内視鏡的結紉術
- e 肝動脈塞栓術



50 5歳の男児。1年前から、手背に皮疹が出現した。放置したところ、肘頭と膝蓋とともに拡大してきたので来院した。右手背の写真(別冊No. 19)を別に示す。

適切な治療はどれか。

- a 酸素療法
- b 凍結療法
- c 温熱療法
- d PUVA療法
- e 減感作療法



◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)